

## 船木 俱子

ふなき ともこ 詩人 1952.1 秋田県男鹿半島に生まれる。掲載作は、平成十三年(2001)土曜美術社出版販売刊の詩集『あなたとおなじ風に吹かれた』より抄出。

ホームページ ( <http://www.tomokofunaki.com> )

# あなたとおなじ風に吹かれた

## 夏夜

夕涼みに と

わたしたちは夜を歩いた  
淡い満月が出ていた  
道の端には待宵草が

あのひとが手折ってくれたとき  
あ この甘さだわ  
昏れていく山道に黄いろい灯りを  
競って咲いた 行く手を照らした  
あのころ なにもかもがはじまりだった  
歳月さえも

花ははんなりと小ぶりで  
月とまるで同じだった  
月はいっそうおだやかで  
かたわらのひとでもあった

## 内部の風景

いちばん終(しま)いのあなたの呼吸(いき)が  
わたしの内奥(うち)に入っていた  
わたしの中枢(おおもと)  
さびしい底のもっと底

いちめんの草紅葉のうえ  
風のゆくのがみえる  
あなただわ  
わたしをゆらすあなただわ

## これからは

黒い身じたくであのひとはいま  
車にのりこむ  
そのとき あのひとを抱いた

わたしのなかに入っていてね  
そしたら死なない  
わたしといっしょに生きるのよ

立ったままだったけれど  
あのひとは嬉しそうだった

ドアを閉める音がして  
とまとの枝がわずかにゆれた  
かおりが青くわたしを流れた

ゆめのなかだったけれど  
あのひとにもういちど伝えた  
わたしといっしょに生きるのよ

## 女郎花

やわらかなひかりがみえる ひかりは  
あつめられてひと粒になり ひと群れになり  
咲きだした五弁（はなびら）は もう数えきれない

あるいは花の背後からひかりは湧いているのではないか  
なつかしさのようなところから こうしていると  
ひかりの呼吸になっていく

わたしのいまがゆるやかになる  
みちたりてくる  
真午のしずかがわたしをあふれ  
女郎花のかたちがゆれる